

きゅうこんびら おおしばい かなまるざ
(2) 旧金毘羅大芝居「金丸座」

1 きゅうこんびら おおしばい しら
旧金毘羅大芝居のひみつを調べよう

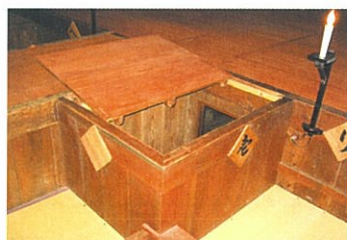


へいせい だいかいしゅう
平成の大改修
 -発見! 江戸時代の芝居跡-



【かけすじの跡】

平成14年12月の調査で、旧金毘羅大芝居「金丸座」の天井でみつけたかけすじの跡です。天井の柱にひっかきぎずとくぎ穴が見つき、花道の頭上を規則正しく並んでいたことから、役者が花道の上空を移動するための装置(かけすじ)の跡だと分かりました。かけすじは、長さ約17m、幅約60cm、花道からの高さは約5mです。この発見によって、江戸時代にはこの「金丸座」で空中をまう芝居が行われていたことが分かりました。



【空井戸】

舞台と本花道のつけぎわにある約半間四方の縦穴を空井戸と言います。役者がここから急に姿を現したり、池や井戸に見立てて飛び込む等の演出に使われます。

※間…一間というのは、たたみの長い辺の長さ。



【旧金毘羅大芝居「金丸座」の中】



【せり】

(一ノ関圭『夢の江戸歌舞伎』より)

舞台がせり上がってくるからくりで、昔ながらの人力で押し上げます。奈落や楽屋に通じています。一人乗りエレベーターのようなもので、大人5人が協力して舞台中央へせり上げます。



【かけすじ(宙乗り装置)】

約30cm幅の板を2枚、2cmぐらいの間かくをあけて天井からつり渡して板の上に係の者が乗り、宙乗りになる役者をつつて、固定してある車のついた板を前後に押し移動させます。大劇場では、電動でワイヤーロープを使っていますが、こんびら大芝居では電動でつり上げ、手動で動かすようになっています。

くわしくは

ホームページ「琴平町」 <http://www.town.kotohira.kagawa.jp>

琴平町教育委員会生涯教育課

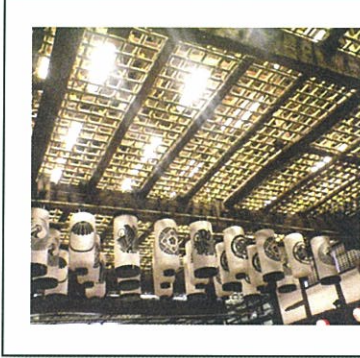
〒766-8502 香川県仲多度郡琴平町榎井891-7 TEL:(0877) 75-6715



たくさんの人たちが、歌舞伎を楽しんでいるよ。
江戸時代、こんぴら参りに来た人たちは、こんなふうにかんぴら歌舞伎を楽しんでいたそうです。



【かけすじを使っの宙乗りの立ち回り想像図】（一ノ関圭『夢の江戸歌舞伎』岩波書店より）



【ぶどうだな】
天井に竹を格子状に組み、荒縄でしめたもの。平成14年12月、かけすじといっしょに発見されました。歌舞伎の演目の中で、役者の動きに合わせて、裏方がぶどうだなを歩きながら客席に紙吹雪などをふらしたと言われていました。また、天井からちょうちんや暗幕をつるすのにも使われます。

えんそく やす ひ げんち い
遠足や休みの日に現地へ行って、調べてみよう
歌舞伎が上演されていない間は、建物として舞台裏まで見学できるようになっています。他にも、「明かり窓」「ます席」「奈落」「牛丸太」など江戸時代のおもしろいからくりがいっぱいです。



【まわり舞台】
大劇場では、電動になっている廻り舞台をこんぴら歌舞伎では、昔ながらに人力で回します。舞台と受け枠の間には、24個の樫材のコロが入っていて、舞台下の心棒を押して廻すことで、直径4間もある舞台が回るしくみになっています。
芝居が上演されるには、大勢の人の協力が必要だということですが、この廻り舞台一つとっても伝わってきます。



江戸時代のからくり

旧金毘羅大芝居「金丸座」は、こんぴらさんのふもとにあり、内部には、廻り舞台、セリ、スポン、ブドウだな、かけすじなど江戸時代のいろいろなしなかけが復元されています。

そのほか、芝居を見やすいようにと、前方が低く後方に行くに従って、自然に高くなっている“平場ます席”をはじめ、自然光を巧みに採り入れた3階の“上部高窓”など、当時の様子が手にとるように感じとれるようになっています。

たくさんの方が金丸座を訪れるひみつはどんなところにあるのでしょうか。



2 「四国こんぴら歌舞伎」のあゆみを調べよう

1 建物の復元

国の重要文化財であり、毎春開催される「四国こんぴら歌舞伎大芝居」の芝居小屋としても知られるこの建物の歴史は古く、1835（天保6）年に富くじの開札場を兼ねた芝居小屋として建築されたと伝えられています。



【旧金毘羅大芝居「金丸座」】

昭和に入り、大修復・復元を経て当時の姿を取り戻しました。その木造

2階建ての建物内は、外からは予想のつかない古き良き時代の芝居小屋そのもので、訪れる人を温かくむかえ入れてくれます。

江戸時代、金丸座は芝居小屋の規模としては、江戸、大阪、京都の大都市にある小屋に匹敵するもので、東西の有名な役者たちは、こぞって金毘羅大芝居のひのき舞台を踏んだといわれています。このことは、いかに“こんぴら”が門前町として栄え、この場所が全国有数の芝居小屋として、その名をとどろかせてたかということ物語っています。

その後、明治、大正、昭和と時代の移り変わりとともに小屋はさびれ、戦後しばらくは映画館として利用されていました。しかし、映画もテレビの普及に押され、やがて廃館となり、長い間荒廃したままになっていました。建物はいたみ、瓦は落ち、壁は崩れ、床板ははがれるなど、くずれる寸前でした。しかしながら、建設後、約150年の風雪に耐え、火災にあうこともなく今日まで生き残ってきたことは奇跡としか言いようがありません。

日本最古のこの芝居小屋を後世に残すべきだと、昭和30年頃より、郷土史家を中心に熱心な復元運動が始まり、昭和45年に国の重要文化財に指定されたのを契機として復元されることになりました。昭和47年から約4年間の工事期間と2億数千万の工事費をかけて、昭和51年4月27日、150年前の姿をそのまま見事に復元したのです。



今も、昔も金丸座で見る芝居は、全国からこんぴら参りに来た人たちの大きな楽しみの一つなんだね。

2 こんぴら歌舞伎の復活



【こんぴら歌舞伎の復活でにぎわう琴平町】

今まで忘れられていたかのようなこの小屋に、永い眠りから目覚める時がやってきました。舞台の仕掛けが普通に動くというこの芝居小屋の魅力に歌舞伎俳優、中村吉右衛門・澤村藤十郎の2人の役者がすっかりほれこんだのです。現代の劇場では全く見られなくなった舞台と客席との近さ、江戸時代の劇場そのままの2本の花道、総ひのきづくりの舞台、そして、全て人の力に頼る奈落の仕掛け。かつて江戸時代、ここで演じられた芝居は、どのようなものだったのか。小屋の雰囲気、まるで思いがけない宝物を見つけたように、2人の役者の血をかきたてたのです。「これこそ歌舞伎の原点だ。」「ぜひ、この舞台をふみたい。」「何よりも客と一体感を感じることができる。」2人の会話が、芝居小屋として35年ぶりに「こんぴら歌舞伎」を復活させるスタートとなりました。

今まで忘れられていたかのようなこの小屋に、永い眠りから目覚める時がやってきました。

舞台の仕掛けが普通に動くというこの芝居小屋の魅力に歌舞伎俳優、中村吉右衛門・澤村藤十郎の2人の役者がすっかりほれこんだのです。

現代の劇場では全く見られなくなった舞台と客席との近さ、江戸時代の劇場そのままの2本の花道、総ひのきづくりの舞台、そ

年	主なできごと
1955(昭和30)年頃	郷土史家など琴平町の人たちの熱心な芝居小屋復元運動が始まる。
1970(昭和45)年	芝居小屋として初めて国の重要文化財に指定される。
1972(昭和47)年 ～1976(昭和51)年	2億数千万円をかけて、江戸時代の姿そのままに移転復元工事が行われる。
1984(昭和59)年	テレビ番組で旧金毘羅大芝居が紹介される。歌舞伎俳優中村吉右衛門さん、澤村藤十郎さんが「こんぴら歌舞伎」復活へ尽力。
1985(昭和60)年	重要文化財での歌舞伎公演の許可を国からもらい、官民一体となった準備活動が始まる。 琴平町の有志によるボランティアに支えられ、「第1回四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催される。
2003(平成15)年	かけすじとぶどうだなの跡が発見される。 宙乗り装置とぶどうだなの復元がはじまる。 耐震工事を行い柱を取り除く。
2004(平成16)年	宙乗り装置を使った第20回公演が行われる。

「旧金毘羅大芝居」復活の道

今では、「四国こんぴら歌舞伎大芝居」の復活により、全国から熱い注目を浴び、四国路の春を告げる風物詩として昭和60年から毎年行われ、平成16年の4月公演で第20回をむかえているよ。



一方、町では、「重要文化財での歌舞伎公演を許可してくれるだろうか。」「お客様には本当に来てもらえるだろうか。」「公演のノウハウのない者に来るだろうか。」という不安ばかりで、実現への道のりは、けわしいものでした。しかし、「こんぴら歌舞伎」が復活できるならと、官民一体となって金丸座での歌舞伎公演に全力を注ぎました。

第1回目のこんぴら歌舞伎は、中村吉右衛門さんが芝居小屋のよさを生かすために自ら脚色した「再桜遇清水」を上演し、全国からの熱烈なファンで町はにぎわいを見せました。このように、役者と地元の熱意が集まり、3日間ともすべて満員で大成功をおさめました。

公演の前日には、役者を乗せた人力車が町を練り歩く「お練り」を行い、町は1,000本を数えるのぼりとお練り見物の人々であふれました。紙ふぶきがまい、かけ声がとびかい、人力車の周りには黒山の人だかりができ、昔のにぎわいもどってきたようでした。



【役者を乗せた人力車が町を練り歩く】

3 地元ボランティアによる町づくり「こんぴら歌舞伎大芝居」

第1回公演の様子

「自然光を最大限に利用して舞台を作りたい。」この吉右衛門さんの要請を受けて、町の青年たちが窓番の役を引き受け、自発的に訓練を始めました。しかし、ほとんどの青年たちがこれまで歌舞伎を一度も見たことがなかったのです。何度も何度も練習を重ね、いよいよ本番をむかえました。

第三幕目、舞台のしかけがフルに生かされる時がきました。舞台そでからの合図で、一階、二階、三階の明かり窓をタイミングを合わせて、閉めていきます。三階の窓番の青年は大変です。屋根の上を走り、外から窓を閉めていかなければならないからです。

真っ暗闇です。明かり窓の暗転により、場内は完全に真っ暗闇になりました。もう、肉眼ではほとんど見えません。観客がどよめきます。その間に役者さんは、空井戸へ。ゆうれいの登場です。スッポンからゆうれいが飛び出しました。青白い火の玉が浮かびます。ゆうれいが花道を行き来します。観客席に落ち込みそうになる度に歓声が上がります。

見事な連携プレイで、歌舞伎公演は大成功をおさめました。永い眠りから覚め、小屋に命がふきこまれた瞬間でした。

こんぴら大芝居の公演は、多くのボランティアの人たちによって支えられています。江戸時代そのままの芝居小屋なので、電気や機械を使わずに上演するため、舞台転換時に使う回り舞台・セリ・スッポンは全て人力により操作します。また、照明は自然光のみで3段階になっている明かり窓の開閉によって行います。これらは全て琴平町商工会青年部員が、ボランティアで行っているのです。

青年部の活動は、公演初日の2日前、役者さんが琴平に到着して通し稽古を始めるところから開始されます。スッポンやセリ、明かり窓などの舞台装置を操作するわけですが、初演までの限られた時間で、芝居の流れと装置の流れや動きを把握するのは至難の技です。

わたしたちは小屋の外でお客様の整理もします。お客様は大人数なので、時間どおりに誘導することが大変です。気持ちよく場内に入らせていただくよう気をつけています。

スッポンやセリは大の男が5~6人がかりで動かすわけですから、人員の配置が重要なポイントになります。芝居の流れ上、セリが上がったとたんに暗くしなければならぬ時には一番大変です。しかし、舞台装置を頻繁に使う役者さんの時は、やりがいがあるてうれしくもありますね。

初めて明かり窓の開け閉めを経験しました。2階の窓に上るのも大変。開け閉めのタイミングをつかむのも大変です。緊張しましたが、いい思い出です。



【琴平町の商工会青年部のみなさん】

舞台裏では役者さんは役柄に入り込んでいますので、その緊迫感や意気込みを肌で感じる事が出来るのは魅力です。

お客様の席への案内、プログラムの販売、掃除などを担当してくれるのが“お茶子さん”です。1日20名から30名の女性がかすりの着物姿でボランティアで参加してくれています。最近では“お茶子さん”の参加も全国的になり、福島県・茨城県・埼玉県・東京都・三重県・京都府・岡山県からも、泊りがけで参加してくれている人もいます。

このように、地元のみならず全国からのボランティアの人たちで“まちづくり”の輪が広がっているとと言えます。



【お茶子さん】